

占星術の学者たちがイエスに礼拝し帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて、エジプトへの逃避を告げます。著者はこれでイエスの運命の上に神さまの計画と働きがあることを示しています。ヨセフはイエスとマリアを連れてエジプトに行き、ヘロデ王が死ぬまでそこにいました。イエスをメシアであると信じる原始教会はイエスの誕生物語をモーセ伝説になぞらえて形成しましたが、著者はイエスをモーセよりも「神の子」とすることに力点をおいていると思われます。15 節で、イエスは「神の子」であることを弟子たちの告白に先立って神さまによる宣言としています。著者の理解によれば、イエスを「神の子」と呼ぶことは人々の信仰を基盤にして成り立つのではないのです。

ヘロデ王は学者たちが神さまからのお告げによって、ヘロデ王に報告せずに帰ってしまったことを知ると、怒り狂って、ベツレヘムとその周辺一帯に住む 2 歳以下の男の子を一人残らず殺すという、幼児虐殺を行ったと記されています。しかし、この幼児虐殺はこの福音書以外に記録がなく、その史実性が疑われ、出エジプト記のモーセ伝説を背景にして生まれたという可能性が強いのです。著者はこの悲劇をエレミヤ書の記事と関連づけ、息子たちを失ったラケルの苦しみ・嘆きを幼児虐殺の嘆き・悲しみと重ね合わせて記しています。

36 年間ユダヤの王であったヘロデが死ぬと、ヨセフは家族をベツレヘムに連れ帰ろうとします。しかし、ヘロデ王の後継者であるアルケラオの残虐性を耳にすると、ナザレに落ち着きます。著者はイエスがベツレヘムに生まれながらナザレへ移ったのは止むを得ぬ事情によるのであり、しかもそれは旧約聖書に予め定められていた、と主張するのです。そして、当時メシア解釈を施されていた旧約聖書の記事を暗示することによって、イエスが「ナザレの人」と呼ばれても、なお「エッサイの根から出る」ダビデ由来のメシアであることに変わりはないと記すのです。

この福音書の読者は著者の属する信仰共同体、ユダヤ人キリスト者の共同体であり、その共同体の人たちは、イエスがメシアであると既に信じている人たちです。著者は同じ共同体の人たちが既に抱えている確信を描き出しているのです。旧約聖書の引用については預言成就ということに強調点があるのではなく、著者の共同体においてイエスがどのように理解されたかを示す手がかりとしての重要性に目を向ける必要があります。15 節の「エジプトからわたしの子を呼び出した」という引用文は、イエスが神の子であり、イエスこそが出エジプトのようなイスラエルの命運を決する今の時を導く者だ、という共同体の確信を表明しているのです。